

弱さを担う協働者たち：パウロ書簡の伝道者像¹⁾

河野 克也

序：伝道者パウロについて考える手がかり

パウロは教会を激しく迫害していた時に、突然、神によって御子の啓示を受け、異邦人に対してその御子の福音を語る伝道者とされた（ガラ1:15-16）。本稿では、パウロが実際にどのような伝道者であったのかを、パウロ自身が書き送った手紙から明らかにすることを試みたい。伝道者パウロの歴史の実像を再構成するにあたって、まずは資料問題について触れておく必要がある。本稿では、パウロの著者性を疑う必要のない真正7書簡（ローマ書、1&2コリント書、ガラテヤ書、フィリピ書、1テサロニケ書、フィレモン書）を一次資料として扱い、いわゆる第二パウロ書簡は必要に応じて参照するにとどめる²⁾。また、使徒言行録については、パウロ自身が書いたものではないため、やはり一次資料とは言えないが、それでもパウロの伝道活動を再構成するにあたって、パウロの真正書簡を補う重要な情報が含まれていると考えられることから、パウロ書簡と照合しつつ、適宜参照する³⁾。

そこで以下において、まずはパウロ書簡を中心に、そして使徒言行録の記述を適宜参照しつつ、この異邦人の使徒パウロの伝道活動の再構成を試みる。次に、パウロがどのような方針で伝道活動を行っていたのかを、パウロ自身の発言をとおして明らかにすることを試みる。その際に、パウロ書簡に集中する「弱さ」に関する用語を手掛かりに、パウロがその伝道活動において重要視

していた価値について考察を試みる。最後に、パウロを支えた協働者たちのうち、パウロ書簡から一定量の情報を得られるテモテとテトスに具体的に目を向け、彼らの働きがパウロの伝道活動をどのように支えたかについても考察する。

1. 伝道者パウロへの接近

パウロの伝道活動は、具体的にいつどこで行われたのであろうか。この点について、正確に年代を確定できる情報はごく僅かである。パウロ自身はガラテヤ書1-2章において、御子の啓示に続く出来事として、「アラビアに出て行き、そこから再びダマスコに戻った (πάλιν ὑπέστρεψα εἰς Δαμασκόν)」こと (ガラ1:17)⁴⁾、「それから三年後に、エルサレムに上ってケファを訪ね、彼のところに十五日間滞在し」て「主の兄弟ヤコブ」にも会ったこと (1:18-19)、「その後十四年たってから、…再びエルサレムに上」って、「異邦人の宣べ伝えている福音について、…おもだった人たちには個人的に示し」て、パウロが神から「割礼を受けていない者への福音を委ねられていることを〔彼らが〕認め」たこと (2:1-2, 7)、そしてその後、「ケファがアンティオキアに来たとき」、異邦人キリスト者との食卓の交わりに関して衝突が生じたこと (2:11-13) を記す⁵⁾。さらに、複数の書簡において言及される「エルサレムにいる聖なる者たちの中の貧しい人々を援助する」ための献金 (ロマ15:26) に関して、パウロ自身が三度目のエルサレム行きを計画していることが述べられる (1コリ16:1-4; 2コリ8-9章、ロマ15:25-28)⁶⁾。これらの出来事は、残念ながらその年代を決定することができない。これとは対照的に、パウロ書簡外の歴史的データとの照合によって年代をある程度決定できるものも、僅かではあるが存在する。それは、(1) 紀元37-39年のパウロのダマスコ脱出⁷⁾ (2コリ11:32-33)、(2) 紀元49年のクラウディウス帝によるローマからのユダヤ人追放令⁸⁾ (使徒18:2)、そして(3) 紀元51-52年のアカイア州総督ガリオンの任期⁹⁾ (使徒18:12) である。このうち(2)と(3)はパウロ自身の手紙には直接言及がなく、どちらも使徒言行録に

あるパウロのコリントでの伝道活動の記述に関連する¹⁰⁾。使徒18:1-4は、パウロがコリントでプリスキラとアキラ夫妻の知古を得て、その天幕づくりの工房で住み込みで働きながら伝道を開始したことを物語るが¹¹⁾、この夫妻がコリントに来た理由の説明として、2節でクラウディウス帝の追放令に言及する（上記(2)に対応）。その後、マケドニア州（おそらくフィリピ教会）からの経済的援助を受け（2コリ11:8-9; cf. フィリ4:15）、パウロが1年6ヶ月にわたってコリントで活動を続けたことを報告した後、12-17節ではパウロがユダヤ人による暴動で総督ガリオンの法廷に引き出された出来事が記される（上記(3)に対応）。使徒言行録16-18章の描くパウロのいわゆる第二次宣教旅行は、その旅程や状況に関してパウロ書簡と概ね一致する¹²⁾。クラウディウス帝の追放令を受けて夫妻がコリントに工房を移し、パウロの「協働者」（ロマ16:3; συνεργοι）としてその伝道を支えたこと、またパウロが最初のコリント滞在中に総督ガリオンの法廷に引き出されたことは、外部資料から確定される49年の追放令¹³⁾と50-51年あるいは51-52年のガリオンの任期と一致することからも、パウロの年代決定において重要な根拠となる。

ここまでの議論をまとめる形で、51年までのパウロの活動の概要を示すと以下のようなになる¹⁴⁾。

【パウロの活動の概要 ①：コリント宣教まで】

- ・紀元30年：イエスの十字架刑 → 33/34年：パウロの回心 → 3年間のアラビア滞在
- ・紀元37年：ダマスコ脱出（アレタス4世のダマスコ支配）
- ・紀元37年：「3年後」の15日間のエルサレム滞在（ペトロ&主の兄弟ヤコブと面会）
- ・紀元37年以降：シリア&キリキア州での活動——「第1次宣教旅行」
→ アンティオキア教会参加・バルナバとの宣教旅行（Acts 11:26-15:40; cf. Gal 2:1, 9, 11-13; 1 Cor 9:6）
- ・紀元46年以降：パウロ独自の宣教活動——「第2次宣教旅行」（Jewett, 164;

Murphy-O'Connor, 24-28)¹⁵⁾

- ガラテヤ、マケドニア、アカイア（コリント）での宣教&教会創立
- ・紀元51年：「14年後」のエルサレム訪問＝使徒会議（Jewett, Murphy-O'Connor）
- ・紀元51年以降：パウロの宣教活動——「第3次宣教旅行」
 - アンテオキア（Gal 2:11-14）、エフェソ（1 Cor 16:8）、マケドニア（2 Cor 1:6; 2:13）、イリリコン（Rom cf. 15:19）、コリント（2 Cor 13:1; Rom 15:26）、エルサレム（Rom 15:25-26）

2. パウロの伝道活動に関するパウロ自身の発言

上段において歴史的に再構成できるパウロの伝道活動の概要を提示したが、ではパウロは自身の伝道についてどのように考えていたのであろうか。いくつか重要と思われる発言を検討したい。

2.1. 「異邦人の使徒」

まずパウロは、ロマ11:13において、自らを「異邦人の使徒」（*ἔθνῶν ἀπόστολος*）と呼ぶ。この自覚は「異邦人の間で彼〔御子〕を福音宣教するよ
うに」（*ἵνα εὐαγγελίζωμαι αὐτὸν ἐν τοῖς ἔθνεσιν*）神から召されたことを語るガラ
1:16での発言と一致する。この「異邦人の使徒」としての使命は、ロマ15:15-
16での発言によれば単に異邦人に福音を伝える活動に限定されるものではなく、むしろ「イエスは主であると告白」（ロマ10:9）した彼らが、実際に神の御心に適う者となるように指導する牧会的な働きも含むものであった。

…それは、異邦人たちの献げ物¹⁶⁾が〔神に〕喜んで受け入れられる、聖なる霊により聖とされたものとなるために、私を異邦人のためのキリスト・イエスの奉仕者とし、神の福音のために祭司の務めを果たすようにしてください。私に与えられた神の恵みによるのです。（ロマ15:16〔私訳〕）

パウロはベニヤミン族出身であり祭司の家系ではないにもかかわらず、ここで自らについて「祭司の務めを果たす」(ιερουργούντα)「イエス・キリストの奉仕者」(λειτουργὸν Ἰησοῦ Χριστοῦ)とされた」と述べている点は興味深い。それだけ、異邦人の聖別を自らの使命として強く意識していたのであろう。

2.2. 「エルサレムからイリリコンまで」

パウロはロマ15:19において、「エルサレムからイリリコンまで弧を描いて(κύκρω)キリストの福音を充満させた」〔私訳〕とするが、それは地中海の北東四分の一の範囲(反時計回りで3時から12時)に相当する。その活動は、実際には主要な街道沿いの中心的都市で福音宣教を行い、中核となるメンバーによって教会の基礎を築いた後に次の場所に移動するという、いわば「拠点方式」ともいうべきものであり、自ら設立した教会に対しては手紙や訪問、協働者の派遣などを通して継続的に指導を続けたものの、自身が地域全体で網羅的に福音宣教を続けることは目指さなかったと考えられる(この点では、アナトリア半島中央内陸部のガラテヤでの伝道は、健康上の理由で例外的に行われたものであろう)¹⁷⁾。ここでパウロはイリリコンの地名を挙げるが、これはバルカン半島北西部のアドリア海に面した地域を指し、現在のアルバニアからクロアチアに相当する¹⁸⁾。この地域の南に位置するマケドニア州には、西のアドリア海沿岸のドゥラキウムから東のビザンティウム(現在のイスタンブール)を結ぶエグナティア街道があり、パウロが教会を創立したフィリピもテサロニケもこの街道沿いにある¹⁹⁾。ドゥラキウムからアドリア海を渡った対岸にはアッピア街道東端の港町ブルンディシウムがあり、そこからアッピア街道を辿ればローマに至るため、おそらくパウロはイリリコンへの言及によってアドリア海の東側での働きの完了を強調することで、ローマに行く意思を示しているのであろう。

2.3. 「他人の土台の上に建てることはしない」

パウロはロマ15:20において自分の伝道方針を説明して、「他人の土台の上に建てることはしないように、キリストが名を呼ばれていないところで福音宣教することを目指してきた」〔私訳〕と述べる。「土台」(θεμέλιος)は、ここ以外では1コリ3:10-12に3回のみ使用されている。1コリ3:10-17では、パウロは自身が「賢い建築家のように」(ὡς σοφὸς ἀρχιτέκτων)、キリストという「土台」を据えたことを自負し、他者がその上に建てる上物が、終末における耐火診断で評価されることを告げる。そこで上物を建てる他者として念頭にあるのは、パウロの後に活動したアポロではなくむしろコリント教会の信徒たちであり、彼らがキリストという土台にふさわしい上物を建てるかどうか責任が問われている。ロマ15章でも同様に、おそらく自身の使命をキリストという土台を据える働きを中心に考えているのであろう。その意味では、パウロによる継続的な牧会的関わりは、自身が据えたこの土台の上に、各地の信徒たちがふさわしい上物を建てるように指導することを目的としていたとすることができる。

2.4. 「すべての人たちに對して、すべてのものとなった」

パウロは1コリ9:22において、「すべての人に、すべてのものとな」ったと述べる。この箇所は、8-10章で展開される偶像に献げた肉をめぐる問題への対応の中心部分に位置しており、この問題で混乱するコリント教会に対して、パウロが使徒の権利を放棄してコリント教会に仕えた自身の姿を模範として提示しながら、コリント信徒に対しても「持てる者」が自身の権利を放棄して「持たざる者」に仕えることを命じている。パウロ自身の模範を締めくくる19-23節でパウロは、「ユダヤ人」(20節)、「律法の下にある人」(20節)、「律法を持たない人」(21節)にはすべて「~のように」(ὡς)、をつけて表現するが、22節の「弱い人」の場合はὡςなしに「弱い人にな」ったと言い切る²⁰⁾。ここには、コリント教会への手紙の随所で強調される「弱い人」との連帯が反映されている。それは23節で、誰一人取り残さず、すべての人と「〔福音〕の共参与者となるため」(〔私訳〕 ἵνα συγκοινωνὸς αὐτοῦ γένωμαι) と述べるパウロの自覚の現

れであり、「弱さ」と福音の本質的な関わりを示している。

2.5. 弱さを担う「キリストに倣う者」

パウロは1コリ11:1において、「私の模倣者になりなさい。私自身もキリストの〔模倣者である〕ように」〔私訳〕と命じるが、この発言は、8-10章の偶像に献げた肉に関する大段落を締め括る重要な位置に置かれている²¹⁾。この発言は、正しい「知識」を誇る「強い者」また「持てる者」が、その知識によって信仰の「弱い者」また「持たざる者」を滅ぼすことがないように厳しく戒める議論の根拠として、9章で示したパウロ自身の模範を想起させつつ、その根底にあるキリストの模範を、あらためて「自分の利益（σύμφορος）ではなく、多くの人の利益を求め」る（10:33）姿として提示する。直接的にはパウロの福音宣教の姿勢を示すこの表現は、同時に、「人の子は、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金（λύτρον ἀντὶ πολλῶν）として自分の命を献げるために来た」（マコ10:45）と語るイエス自身の言葉を想起させる²²⁾。

このキリストが起点となる模範の連鎖は、ここでのパウロの勧告にとって極めて重要な根拠であったと考えられる。パウロはロマ14:1-15:6で、「信仰の弱い人を受け入れなさい」（14:1）、また「強い者は強くない者の弱さを担うべき」（15:1）と語り、さらに「強い人」の行動のゆえに「心を痛めている」信仰の「弱い人」を指して、「キリストはそのきょうだいのために死んでくださった」（ὕπὲρ οὗ Χριστὸς ἀπέθανεν）ことを強調する（14:15）。パウロは1コリ8-10章の議論で、すでにこれとほぼ同じ表現によって、やはりキリストが信仰の弱い「きょうだいのゆえに死んだ」（〔私訳〕 δι' ὃν Χριστὸς ἀπέθανεν）と端的に述べている²³⁾。キリストのを起点とするこの模範は、当然ながらキリストからパウロへ、そしてパウロからパウロの創立した教会の信徒たちへと継承されることが意図されている。

このように、「弱さを担う」ことはパウロの伝道にとって極めて重要であることから、パウロ書簡において「弱さ」に関連する用語がどのように使用

されているかを確認しておきたい。ギリシア語の用語としては、名詞がアスセネイア (ἀσθένεια)、アスセネーマ (ἀσθένημα) の二つ、動詞がアスセネオー (ἀσθενέω)、形容詞がアスセネース (ἀσθενής) の四つの単語である。それぞれのパウロ書簡における用例を確認すると、名詞 ἀσθένεια は11回 (ロマ6:19; 8:26; 1コリ2:3; 15:43; 2コリ11:30; 12:5, 9 [2回], 10; 13:4; ガラ4:13) に対して、もう一つの名詞 ἀσθένημα は1回のみ (ロマ15:1) である。動詞 ἀσθενέω は15回 (ロマ4:19; 8:3; 14:1, 2; 1コリ8:11, 12; 2コリ11:21, 29 [2回]; 12:10; 13:3, 4, 9, フィリ2:26, 27)、形容詞 ἀσθενής は15回 (ロマ5:6; 1コリ1:25, 27; 4:10; 8:7, 9, 10; 9:22 [3回]; 11:30; 12:22; 2コリ10:10; ガラ4:9; 1テサ5:14) となっている。これらの用例うち、1コリ2:3とガラ4:13の名詞 ἀσθένεια はパウロの衰弱・病気として身体上の弱さ、ロマ4:19 (アブラハム) とフィリ2:26, 27 (エパフロデイト) の動詞 ἀσθενέω はそれぞれアブラハムの老いとエパフロデイトの病気としての身体上の弱さ、また形容詞 ἀσθενής は1コリ11:30では身体上の弱さ、2コリ10:10ではパウロの印象、ガラ4:9では神に敵対する霊的諸力の弱さ²⁴⁾を表しており、パウロの用例全体として見ると、身体上の弱さよりも神学的概念として圧倒的に多く使用されていることがわかる。

このパウロの用例に関連して言えば、第二パウロ書簡では名詞 ἀσθένεια が1テモ5:23で一回、動詞 ἀσθενέω が2テモ4:20で一回、それぞれ病気の意味で使用されるのみであり、弱さを神学的意味合いにおいて使用する用例が真正書簡に限定されていることは注目に値する。これはコリント教会においてパウロの使徒職に対する疑いが深刻化する中、2コリ10-13章でキリストにある弱さを誇ることによる反論にスペースを割いていることもその一因であろう。しかしそれは単なる弁明ではなく、最終的にはキリストの死を起点とする福音の本質そのものに対するパウロの確信に起因するのであり、この弱さの神学的概念化はパウロに特徴的と言えるであろう²⁵⁾。

3. 伝道者パウロの弱さを担う協働者たち

パウロはロマ15:1で「強い者は、強くない者の弱さを担うべきであ」とし、その模範としてキリストを提示する。また1コリ9:22では、パウロ自身も福音のために「弱い人には、弱い人にな」と述べ、また2コリ11:21-29では、強さを誇示する「偽使徒たち」（および彼らに影響されたコリント信徒の一部）に対抗して「弱さ」を誇りつつ、その一環で列挙する苦難の最後に「すべての教会への心遣い」を挙げて、「誰かが弱っているのに、私も弱らずにいられるでしょうか。誰かがつまづいているのに、私が心を痛めずにいられるでしょうか」と述べる（28-29節）。

この「弱さを担う」働きは、パウロ個人だけでなくパウロの「協働者たち」（συνεργοί）にも当てはまる。パウロが諸教会に派遣したテモテもテトスも、それぞれ派遣された先の教会でそのような働きをしたことが想定されるが、それ以上に、彼らはパウロ自身の弱さを担い、パウロの働きを補った点で特筆に値する。以下、テモテおよびテトスの弱さを担う働きを、まずパウロ書簡から確認し、それを使徒言行録の記述と照合することで、彼らの働きの一端を明らかにしたい²⁶⁾。

3.1. テサロニケ教会：テモテ

パウロはテサロニケ教会設立時の状況について、フィリピでの苦難の後にテサロニケを訪れ、「激しい苦闘の中でも…神の福音を語った」と述べる（1テサ2:2）。その後、「しばらくの間、〔彼ら〕から引き離されていた」（2:17）が、テサロニケ信徒の様子を知るために、パウロはアテネから「私たちの兄弟で、キリストの福音のために働く神の協力者テモテを遣わす。その目的については、彼ら「の信仰を励まし、このような苦難の中で、動揺する者が一人もないようにするため」（3:1-3）と述べる。その後、戻ってきたテモテが彼らの「信仰と愛について、良い知らせをもたらした」ことで、パウロは彼らの「信仰に

よって慰められ」た(3:6-10)。この記述から、テモテ自身が困難の中にあるテサロニケ信徒の信仰を支えることに大いに貢献したのであり、単なる伝令以上の存在だったことが読み取れる。

他方、使徒17:1-9はパウロとシラスによるテサロニケ宣教を報告するが、その記述から、具体的にユダヤ人の反対によってパウロ一行が街から追放された様子が窺える²⁷⁾。17:10ではパウロとシラスがベレアに移動し、17:14-15ではシラスとテモテはベレアに残りパウロだけがアテネに向かったことが報告される。18:5はシラスとテモテがマケドニア州から戻ってきたことを報告するが、その記述にはテサロニケ信徒の様子に関するパウロへの報告は含まれない。1テサ1:1の差出人に含まれるシルワノはおそらく使徒17-18章のシラスと同一であるとして、そのシルワノ／シラスの役割などの詳細は不明であるものの、パウロと使徒言行録の記述は概ね一致している。いずれにせよ、パウロ自身がテサロニケに戻れない状況にあって、テモテの果たした役割は間違いなく大きい。

3.2. コリント教会：テモテ、テトス

コリント教会との関係についても、テモテは重要な役割を果たしている。1コリ1:1の差出人にテモテの名はないが、パウロは4:17で1コリント書の送付に先立ってテモテを派遣したことに言及する。1-4章でコリント教会内の分派争いの問題を取り上げたパウロは、その締めくくりとして自身を模範として提示し、「テモテを…遣わした」目的を「キリスト・イエスにある〔パウロ〕の生き方を〔彼ら〕に思い起こさせる」ためであると述べる(4:16-17)。パウロがテモテを紹介する17節の文面は、テモテがコリント信徒に知られていなかったかのように読めるが、パウロがコリント宣教の後にエフェソに移動してから加わった信徒を念頭に置いた表現と読めば、特に違和感はない(1コリ1:14-16)。パウロ自身、2コリ1:19では最初のコリント宣教に関して自身の他にシルワノとテモテの名を挙げている。いずれにせよ、パウロがテモテに全幅の信頼を置いていたことはこの紹介文から十分明らかである。パウロはテモテの派

遣に際して、人数は明記されないが複数の「きょうだいたち」を同行させた(16:10-11)。それらの「きょうだいたち」の名前も役割も明記されていないことから、テモテがパウロの代理として一行の中心的役割を担っていたことが窺える。

1コリ4:18-21の表現からは、コリント信徒の一部の者たちとパウロの関係がすでにかなり緊迫していたことが窺える。以下、ヴィクター・ポール・ファーニッシュの再構成に基づいて、時系列に沿って事態の推移を確認する²⁸⁾。

テモテはマケドニア経由の陸路でエフェソからコリントに派遣されたのに対して(54年夏/初秋)、手紙の方は船で送られたため(54年秋)、テモテよりも先に到着し、その文面が災いしてか、パウロに対するコリント信徒の一部の反発が強まったと考えられる。テモテがコリントに到着すると(55年初春)、状況が想定以上に酷かったため、テモテはその状況を報告するために船で急遽エフェソに戻る。その報告を受けたパウロは、状況を打開するため自らコリントに赴くが、事態はむしろ悪化し、おそらくある人物との衝突を受けて(55年春、2コリ2:5-11; 7:11-12)、パウロはすぐにエフェソに引き返すことになる。その際に、またすぐにコリントに戻ってくると告げていたにもかかわらず(2コリ1:15-16)、エフェソに戻ったパウロは、再び自らコリントに行く代わりに「涙ながらの手紙」を書き送るとともに(55年晩春、2コリ1:23-2:4)、テトスをコリントに派遣する(55年夏、2コリ2:13; 7:5-7)。その間に、パウロはエフェソでおそらく逮捕・投獄され(55年夏)²⁹⁾、そこで死後の復活以外の希望が絶たれるほどの危機に遭遇し、死を覚悟する(2コリ1:8-11)。幸いパウロは獄から解放されてエフェソを出入し、おそらくテモテを伴ってトロアス宣教を開始し(55年晩夏、2コリ2:12)、その後マケドニアに向かう(2コリ2:13; 7:5)。パウロはおそらくフィリピでコリントから到着したテトスと再会し、関係改善の良い知らせを受けて慰められる(2コリ7:6-7, 13-15)。

この時点でのコリント教会とパウロの関係改善は、パウロの書いた「涙ながらの手紙」のみならず、テトスによる執り成しが大きかったと推察される。2コリ7:15は、テトス到着の時点ですでにコリント信徒の「一同が従順で、どん

なに恐れおののいて〔テトスを〕歓迎してくれたか〕について述べていることから、確かに「涙ながらの手紙」が大きな役割を果たしたことは疑い得ないが、それでも一度はエフェソに事実上逃げ帰るほど事態が悪化していた中でテトスを派遣したことは、パウロがテトスの執り成しに望みを託していた度合いを物語る。したがって、テトスもまた、単なる伝令ではあり得ない。

この関係改善を受けて、パウロはエルサレム教会の貧しい者たちのための募金の勧めを含む手紙(2コリ1:9章)を書き、集金役のテトスと他2名の兄弟たちに託してコリント教会に送付する(55年秋)。ところが、この集金役の派遣が事態を再度悪化させたことがわかる(2コリ12:14-18)。パウロはその冬をマケドニアで過ごしたが、冬が明けるとコリント教会に関する新たな深刻な事態を知るに至る。パウロはその事態を打開するために2コリ10-13章を書き送り(56年春/夏)、その中で「三度目の訪問」を予告する(12:14)。この事態の悪化は、パウロがコリント教会から生活費を受け取ることを拒否しながら、別の口実を設けて集金に来たと誤解されたことがその主な要因であろう(2コリ11:7-11; 12:16-18; cf. 1コリ9:1-18)。また2コリ11:1-15では、この点に関連して「偽使徒たち」への批判(11:12-15)が述べられていることは、おそらくこの者たちがコリント教会に対して悪影響を及ぼし、エルサレム教会の「あの偉い使徒たち」(11:5)の権威を傘に、パウロの使徒職と募金の意図について疑いを焚きつけたと想定することができる。いずれにせよこの件に関しては、「そのテトスがあなたがたから貪り取るようなことをしたでしょうか」(12:18)とのパウロの言葉からテトスの潔白は明らかであろう。これに対して、12:18で言及される「あの兄弟」(cf. 2コリ8:18-19)についてはテトスと同じように弁護されておらず、また2コリ8:22で推薦されていた「もう一人の兄弟」に関しては言及すらされない。彼らは「諸教会の使者であり、キリストの栄光を映す者」(2コリ8:23)とさえ言われていたが、この件に関して詳細は不明である。

パウロとコリント教会の間の手紙としては、この暗澹たる状況を描く2コリ10-13章が最後であるが、ローマ書はコリントのガイオ宅から書き送られており(ロマ16:23)、さらに「マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムにいる

聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意した」(15:26) ことを報告していることから、パウロとコリント教会の関係が「三度目の訪問」によって改善したことが分かる。この最終的な和解に際しては、誰がどのように貢献したかは不明である。ロマ1:1の差出人はパウロ一人であるが、16:21では「私の協力者テモテ」からの挨拶が記されており、ここでもテモテが一定の役割を果たしたことが推察される。

他方、使徒18:12-17はガリオンがアカイア州の総督だった時の暴動に言及し(51年夏)、その後パウロがプリスキラとアキラを伴ってエフェソに移動したことを告げる(18:18-19)。その後パウロはエフェソからエルサレムに向かい、アンティオキアに戻った後、「ガラテヤ地方やフリギア地方を次々に巡回し」(18:22-23)、再びエフェソに戻って長期宣教した(19:1-10)。使徒19:23-40はエフェソのアルテミス神殿関係者による暴動に言及するが、パウロ自身は暴動に巻き込まれていないとする(19:30-31)。実際には、この関連でパウロが逮捕・投獄されたのであろう³⁰⁾。使徒20:1-3は、パウロが「この騒動が収まった後…マケドニア州へと出発し」、その後「ギリシアに来て、そこで三ヶ月間過ごした」ことを告げるが、それはコリント教会からローマ書を書き送ったとのパウロの発言と一致する。そこからシリア州に向かう先遣隊にはテモテが含まれている(20:4)。

【パウロの活動の概要 ②：コリント宣教関連】³¹⁾

- 50-51 パウロ、シルワノ、テモテによる会衆の創立：テサロニケ信徒への手紙送付。
- 51 夏：総督ガリオの前でのパウロの尋問と、それに続くコリント出立。
- 51-54 この間の期間にどこか不明な場所からコリント宛の手紙A(失われた)が送付される。
- 54 おそらく夏か初秋：マケドニア経由でのテモテの派遣。
- 54 秋：テモテの出立後、パウロがコリント教会からの手紙と、それと

は別に口頭で教会の状況に関する報告を受け取る。

- 54 **おそらく10月**：手紙B (=1コリ) がエフェソから船で送付される。
- 55 **初春**：マケドニアからテモテがコリントに到着。困難な状況を発見し、パウロに報告するため急遽エフェソに戻る。
- 55 **春**：テモテの憂慮すべき報告を受け、マケドニアからパウロが緊急の(「涙ながらの」) コリント訪問を行う。パウロ自身はコリント会衆のメンバーの一人との間で何らかの悲劇的衝突をし、ごく短期間の滞在の後、明らかにまた戻ってくることを決意した上で、マケドニア経由でエフェソに戻る。
- 55 **晩春**：手紙C (失われた「涙ながらの手紙」) がエフェソから送付される。
- 55 **夏**：テトスがエフェソからコリントに派遣される。パウロはアジア州の首都(エフェソ) で逮捕・投獄される。フィリピ書およびフィレモン書が送付される。
- 55 **晩夏**：パウロの獄からの解放とエフェソ出立。おそらくテモテを伴ってトロアス宣教を開始する。
- 55 **秋**：パウロはトロアスを出立してエフェソに向かい、(おそらくフィリピで) コリントから到着したばかりのテトスと合流する。
- 55 **秋**：マケドニア(フィリピ?) から、手紙D (=2コリ1-9章) が、テモテと他2名の兄弟たちに運ばれて送付される。
- 55-56 **冬**：パウロのマケドニア滞在(フィリピ? テサロニケ? ベレア?)
- 56 **春か夏**：パウロはコリント教会に関する新たな、極めて深刻な事態の報告を受けて、おそらくテサロニケあるいはベレアから手紙E (=2コリ10-13章) を送付する。また、ガラテヤ諸教会宛の手紙を送付する。
- 56 **夏か秋**：エルサレムに向かう途中での、パウロの3度目のコリント訪問。ここから送付されたローマのキリスト者に宛てた手紙の中で、この使徒はマケドニア州とともにアカイア州のきょうだいたち

もユダヤのキリスト者たちへの募金に貢献したことを示す。

57 春：パウロはコリントを出立し、エルサレムに向かう。

結語

以上、駆け足でパウロの伝道の足跡を辿りつつ、伝道者としてのパウロへの接近を試みた。パウロは何より、他者の利益のために命を差し出したキリストの模範から、他者の「弱さ」を担うことに福音の本質を見た。それとともに、パウロ自身も自らの「弱さ」を突きつけられ、その弱さと格闘した様子も確認した。そうした「弱さ」は、テサロニケ教会に関しては外的な妨害により、またコリント教会に関しては自らの手紙の誤解を招く表現や厳しすぎる表現、また対面での衝突、外部からの反対運動など、さまざまな要因によるものであった。その点では、パウロの協働者としてテモテとテトスの働きが評価されるべきであろう。特に少なくとも部分的には自らの発言や態度が招いたコリント教会との関係悪化に際しては、この二人の働きのなしには、関係の改善は困難だったのではないかとさえ思われる。従来、(牧会書簡でのイメージが先行してか?) テモテもテトスも、偉大な宣教者パウロの「弟子」として、伝道牧会についてパウロの指導を受ける成長過程の若手牧師との印象が強い。しかし、パウロ書簡そのものから浮かび上がる二人の姿は、むしろパウロの弱さを担う重要な「協働者」であり、イメージの修正が必要なのではないかと思われる。伝道牧会は一人の英雄的働きによるものではないことが、この駆け足の外観からも明らかであろう。

パウロ自身について言えば、教会を迫害していた時代のパウロは、決して「弱さ」によって特徴づけられる人物ではなかった。クリスター・ステンダールの言葉を使えば、彼は「強靱な良心」(“robust” conscience)³²⁾の持ち主であり、「異端」と見なした相手に対しては、容赦なく迫害や処刑をもって臨んでいた。そのパウロが神から御子を啓示された時、彼の世界観と価値観は完全に覆され、そこから翻って見たときに、かつての自分を、「私たちがまだ弱かつ

た頃」にキリストが「死んでくださった」(ロマ5:6)と表現せざるを得ない、その弱い存在であったことを初めて自覚したのであろう。パウロはこの敵をも愛する「キリストの愛が私たちを捕らえて離さない」(2コリ5:14)ゆえに、「[キリスト]のために苦しむこと」(フィリ1:29)³³⁾を自らに課し、他者の弱さを担う伝道牧会に邁進したのである。

(かわの・かつや)

注

- 1) 本稿は2025年1月9日に行われた東京神学大学主催の第53回教職セミナー(主題は「福音の担い手:伝道者論をめぐって」)における発題に基づき、配布資料として提供したレジュメを論文として整えたものである。その性質上、先行研究の紹介は最低限にとどめた。
- 2) 第二パウロ書簡(2テサロニケ書、エフェソ書、コロサイ書、1&2テモテ書、テトス書)は、パウロの著者性について疑問視する研究者が多いことから、真正書簡とは区別して扱う必要がある。特に牧会書簡(1&2テモテ、テトス)については、パウロが弟子であるテモテとテトスに個人的に書き送った手紙という形で書かれており、また1テモテとテトスについては、「監督」と「長老」の資質について述べていることから、伝道者論を考えるには重要と思われるが、本稿ではパウロの歴史の実像に迫ることを目標として設定するため、これらの文書の資料としての扱いは二次的なものとなる。
- 3) パウロの伝道活動の再構成における使徒言行録の資料価値については、研究者の間でその評価が大きく異なる。その議論の詳細、および次項で提示する再構成の根拠については、David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*, 3rd ed. (London, et al.: Bloomsbury, 2015), Chap. 3: "Before and After his Encounter with Christ" (pp. 37-59) を参照。
- 4) 聖書引用は、ことわりのない限り聖書協会共同訳による。ここで「再びダマスコに戻った」と言っていることから、「アラビアに出て行」く前にダマスコにいたことが想定されるが、それは少なくともその地理的情報に関しては、パウロがダマスコ途上で御子の啓示を受け、ダマスコのアナニアのもとで洗礼を受けて伝道を開始したとする使徒9:1-22の記述と合致する。ただしパウロ自身は、ア

ナニアにも、ダマスコでの「かなりの日数」（使徒9:23）の伝道活動にも言及しない。

- 5) Horrell, *Introduction*, p. 45 を参照。
- 6) パウロ書簡からは、パウロのエルサレム訪問は最後の計画も含めて3回のみであるが、使徒言行録では5回の訪問が言及されており（使徒9:26-30; 11:29-30 [12:20]; 15:1-29; 18:22; 21:15ff）、食い違いが生じている。この点については、Horrell, *Introduction*, pp. 45-48 を参照。
- 7) このダマスコ脱出そのものは使徒9:25にも記述があるが、直前の23-24節ではユダヤ人による殺害計画が要因とされており、ナバテア王国の「アレタ王〔アレタス4世〕の代官」によるパウロ捕縛の試みを要因とするパウロの記述（2コリ12:32）と食い違う。アレタス4世の治世は前9年から後40年であり、ダマスコがナバテアの支配下に下るのが37年であることから、パウロのダマスコ脱出は37-39年の出来事となり、30年のイエスの十字架刑を起点にパウロの「回心」を33/34年、アラビア宣教を3年とすると、37年脱出で一致する。
- 8) Suetonius, *Claudius* 25:「ユダヤ人は、クレストゥスの煽動により、年がら年中、騒動を起していたので、ローマから追放される」（『ローマ皇帝伝』下巻、國原吉之助訳〔岩波文庫：岩波書店、1986年〕、110頁）。ここで「クレストゥス」という個人名が出ているのは、キリスト信者がローマのシナゴグで宣教活動をしたことで騒動が生じた、ということを示していると考えられる。
- 9) デルフォイ出土の碑文にガリオンの任期が記されている（Horrell, *Introduction*, 49-50; Jerome Murphy-O'Connor, *St. Paul's Corinth: Texts and Archaeology*, [Wilmington, DE: Michael Glazier, 1983], pp. 141-52, 173-76）。
- 10) パウロとコリント教会の関係はかなり複雑であり、パウロの手紙の文面からも悪化と改善を繰り返したことが明らかである。その詳細は、下段3においてパウロの協働者の貢献を考察する際に改めて提示する。
- 11) パウロ書簡では、1コリ16:19とロマ16:3にこの夫妻への言及がある（パウロ書簡ではプリスカ）。1コリント書はエフェソから書き送られているので、コリント教会当での挨拶にこの夫妻からの挨拶が含まれていることは、夫妻がパウロと共にエフェソに移動し、そこで教会をエフェソ教会を支える中心的な働きをしたとする使徒18:18-28の記述と一致する。また、パウロが三度目のコリントの滞在時にローマ教会に書き送った手紙の末尾の挨拶冒頭にこの夫妻への挨拶（16:3）があることから、紀元54年にクラウディウス帝の死（暗殺）により追放令が失効したことで、夫妻がローマに戻った可能性が考えられる。なお、ロー

マ書16章の挨拶部分が元来ローマ書に属していたことについては、橘耕太「ローマ人への手紙16章の宛先はどこか」『キリスト教学』61号（2019年）23-42頁を参照。

- 12) 1テサ2:2は、パウロがフィリピの後にテサロニケで活動したこととフィリピで経験した困難に言及しており、使徒16:11-17:9はその記述と概ね対応する。
- 13) この追放令について、G・リュデマンは紀元49年ではなく41年とするが、それはクラウディウス帝が41年にユダヤ人に認められていた集会の自由の特権を剥奪したことを述べるディオ・カッシウスを根拠とする（Dio Cassius, *Roman History*, lx.6; Horrell, *Introduction*, pp. 49, 58n.25; G. Lüdemann, *Paul, Apostle to the Gentiles: Studies in Chronology* [London: SCM, 1984], pp. 164-70 を参照）。メアリー・スモールウッドは、この2つの年代について、紀元41年はユダヤ人を追放せざるを得ないほどキリスト信者による宣教活動がローマで活発に行われるようになった年代としては早すぎると考える（上段注8を参照）。この年はガイウス・カリグラ帝の暗殺を受けてクラウディウス帝が即位した年であり、38年のアレクサンドリアでの大規模なユダヤ人迫害を受けて皇帝の介入を求めるためにローマに派遣されていたユダヤ人使節団に対して、クラウディウスは彼らの従来の特権を再確認するとともに、それ以上の市民権を求めることがないように釘を刺した。ディオ・カッシウスの記述は、このユダヤ人使節団を支援するローマのユダヤ人の動きをクラウディウスが警戒していたことを背景とするのであろう。いずれにしても、おそらく41年の特権剥奪の数年後にはその特権は回復されたと考えられるが、その後キリスト信者による宣教活動がローマで目立つようになったことで、49年にクラウディウスはより厳しい追放例を出すに至ったのであろう（E. Mary Smallwood, *The Jews Under Roman Rule from Pompey to Diocretian: A Study in Political Relations* [Leiden: Brill, 1981], 210-16 を参照）。
- 14) Horrell, *Introduction*, pp. 50-53 を参照。
- 15) Horrell, *Introduction*, p. 51; Robert Jewett, *Dating Paul's Life* (London: SCM, 1979), p. 164; J. Murphy-O'Connor, *Paul: A Critical Life* (Oxford: Oxford University Press, 1996), pp. 24-28.
- 16) この「異邦人たちの献げ物」（ἡ προσφορά τῶν ἐθνῶν）という表現が異邦人自身を「献げ物」として描いていることについては、拙論「主の再臨を待ち望む召された聖なる者たち」『伝道と神学』14号（2024年3月）96頁を参照。
- 17) この「拠点方式」については、佐竹明『使徒パウロ：伝道にかけた生涯』（新版：新教出版社、2008年）188-89, 200-202頁、ガラテヤでの伝道については185-86頁を参照。

- 18) ローマ帝国の属州イリュリクムは、初代皇帝アウグストゥスの下で紀元前27年に元老院級属州として始まったが、当地での反乱に対応するため紀元前11年に皇帝直轄属州に変更され、さらに紀元10年には大規模な反乱の鎮圧後、北部パンノニア州と南部ダルマティア州に分割された。ただし、地名としてのイリュリクムは、その後もダルマティアを指す名称や、より広い範囲を指す名称として使用されたことから、ここでパウロが言及するイリリコンはダルマティアあたりを指すのであろう。詳細はJohn McRay, "Illyricum (Place)," *Anchor Yale Bible Dictionary*, III: 388-89を参照。
- 19) 少なくとも、パウロ書簡および使徒言行録の記述から判断する限りパウロ自身がイリリコンの地域にまで入って伝道を行った形跡はないため、ここでの言及はその南西の端あたりを意識した表現であろう。
- 20) こうした強い口調にもかかわらず、パウロは決して批判する相手を名指ししない。それは1コリ5章の性的不道徳を行っている男性にも、2コリ2章のパウロと衝突した人物にも当てはまるのであり、真正書簡に一貫して見られる特徴であると言える。これに対し、牧会書簡では名指しして相手を非難していることは、たとえ個人宛の手紙の体裁を取っているにせよ極めて対照的である（1テモ1:20; 2テモ1:15; 2:16-18; 4:10, 14-15）。
- 21) 原文は *μιμηταί μου γίνεσθε καθώς καὶ γὼ Χριστοῦ*。この節の位置については、11:2が *δέ* によって話題が切り替わっていることから、10章までの議論の末尾に属することがわかる。
- 22) パウロ書簡の方がマルコ福音書よりも執筆年代が先であることから、パウロがこの発言をマルコにあるそのままの形で知っていたかどうかは確定できないが、イエスの命を身代金とするこの理解は贖いを「買い取り／身受け」のイメージで捉えており、1コリ6:20と7:23で繰り返される「あなたがたは代価をもって買い取られた」（*ἠγοράσθητε γὰρ τιμῆς/τιμῆς ἠγοράσθητε*）という発言と重なり合う。このことから、マコ10:45が表現する内容について、パウロがイエス伝承として受け取っていた可能性は十分に考えられる。
- 23) 日本語訳は「その人のためにも」と、余計な「も」を加えて訳すことで、この発言の修辭的な厳しさを損なっている。この点については、拙論「主の再臨を待ち望む召された聖なる者たち」『伝道と神学』14号（2024年）91-110頁、特に97-98頁、108頁注24を参照。
- 24) ガラ4:9の用例は靈的な敵対勢力についての発言であることから、身体的弱さを表す他の用例と同列に扱うことはできないが、それでも神との比較においてそ

これらの勢力が「弱い」ことを指摘するこの否定的な発言は、「弱さ」を伝道において担うべきものとして肯定的に神学化するパウロの基本的な用例とは対照的である。その意味では、身体的な弱さを表す用例とも区別する必要があるであろう。

- 25) パウロにおける「弱さ」の神学的分析は、佐竹明「補説3. II コリ10-13章における『弱さ』」、『第二コリント書10-13章』（新教出版社、2019年）、607-17頁を参照。この「弱さを担う」パウロの伝道方針に関連して、佐竹は、それが都市部に集中するパウロの「拠点方式」の伝道活動と矛盾する可能性を指摘する——「彼のこのような拠点方式の伝道には、問題がないわけではない。中央から地方、辺境へという図式は、神は弱さにおいて自らを表す〔2コリ12:9〕とする彼自身の福音理解と果たして無理なく調和するであろうか」（佐竹『使徒パウロ』202頁）。この問題については、佐竹自身も指摘するようにパウロの終末意識があり、そのため「広い世界に限られた時間に福音を伝える、この課題をこなすには拠点方式によらざるを得ない」（佐竹『使徒パウロ』201頁）ということである。パウロの理解としては、この終末意識に加えて、前述のキリストの模範の連鎖を上げることができるであろう。すなわち、パウロ自身は拠点方式によって主要な都市を回って伝道範囲を拡大させることを優先しているが、その間にも必要に応じて訪問し、手紙を書き送り、協働者たちを派遣して牧会的な関わりを維持しつつ、協働者のみならず信仰者を「弱さを担う」キリストの「模倣者」へと育成することによって、彼らがその地域での伝道を担うことが意図されていたと考えることができるであろう。もちろん、切迫した再臨待望がパウロの意識の多くを占めていたことからすれば、そうした弱さを担う伝道は、キリストに躓いた同胞のユダヤ人の回復も含めて、最終的には人間には「究め難く…たどり難い」神の計画による実現に委ねていたのであろう（ロマ11:33-36; vv. 25-27も参照）。
- 26) ここでは教会書簡は扱わない。なお、1テモ5:17-20にある長老が「二倍の尊敬〔別訳：報酬〕に値する」との発言は、自らの権利を放棄して弱い人に仕えることを促すパウロの姿勢と比較して著しく対照的であることから、パウロ自身の発言とは考え難い。
- 27) 9節の「保証金」（τὸ ἰκανόν）〔形容詞 ἰκανός の中性形の実詞的用法で「十分なもの／額」を意味する〕は、パウロが再び町に入ることがないようにするためのものと考えられる。
- 28) Victor Paul Furnish, *II Corinthians: A New Translation with Introduction and Commentary* (AB; New York: Doubleday, 1984), pp. 54-55.

- 29) この投獄の際に、獄中からフィリピ書とフィレモン書を書き送ったのであろう。
- 30) ロマ16:3-4でパウロは、プリスカとアキラが「命懸けで私を守ってくれた」と述べるが、それはこの時のことであろう。
- 31) Furnish, *II Corinthians*, “IV. A Chronological Overview” (pp. 54-55) による。
- 32) Krister Stendahl, “The Apostle Paul and the Introspective Conscience of the West,” in idem, *Paul Among Jews and Gentiles, and Other Essays* (Philadelphia: Fortress, 1976), p. 80.
- 33) この「弱さ」を担うこととキリストのために「苦しむ」ことの関連性については、教職セミナーでの発題の際に小泉健教授からのご質問の中でご指摘があったことを、感謝をもって報告したい。その場では簡単な応答しかできなかったため、ここでその応答に補足したい。フィリ1:29では動詞パスコー（πάσχω）の不定詞が使用される。Danker の辞典の定義によれば、この動詞自体の原義は「経験する」という一般的なものであり、文脈によって肯定的、否定的、中立的な意味に使用されるが、新約における用例の大半は「痛みを伴う経験という否定的な意味」であり（Frederick William Danker, *Concise Greek-English Lexicon of the New Testament* [Chicago and London: University of Chicago Press, 2009] , pp. 274-75)、実際にパウロ書簡での用例（1コリ12:26; 2コリ1:6; ガラ3:4; フィリ1:29; 1テサ2:14）を見ても、肯定的な用例はガラ3:4で信仰を持った時に聖霊を受けた経験を指す1回のみで、他はみな「苦しむ」という否定的な意味である。このうち、1コリ12:26は、教会を体に例えて、一つの部分の痛みも喜びも全体で共有することを述べており、ここでの痛みは本稿で強調した「弱さを担う」パウロの中心的な伝道方針と重なり合う。また2コリ1:6では、パウロ一行が「アジアで生じた私たちの苦難について」（ὕπερ τῆς θλίψεως ἡμῶν τῆς γενομένης ἐν τῇ Ἀσίᾳ）述べる8-11節を念頭に置いて、その際にパウロ自身が受けた慰めの経験がコリント信徒の慰めとなることを告げる。ここでの「苦難」は別の単語（θλίψις）だが、キリストのための痛みとしてフィリ1:29と同じ理解を表していると考えることができる。1テサ2:14の用例は、テサロニケの信徒たちが、同胞から受けた痛みにおいて「ユダヤに存在する、キリスト・イエスにある神の諸教会の模倣者となった」（私訳）として、やはりキリストのための痛みを表現する。用例は限られるものの、「弱さを担う」ことはキリストのために苦しむことであり、キリストの模倣者である信徒一人一人が「恵みとして受けた」（フィリ1:29 [私訳] ; ἐχαρίσθη）ものなのである。